

◆◆◆ 平成 22 年（2010 年）7 月の北半球中緯度の高温について

気象庁は、8 月 11 日に 7 月の北半球中緯度での異常高温について以下のとおり発表しました。

北半球中緯度では、ヨーロッパからロシア西部をはじめとする多くの地域で顕著な高温となりました。これは、北半球中緯度の対流圏全体の気温が非常に高く、また、偏西風の南北蛇行が非常に大きくなったことが要因とみられます。

1 天候の状況

- ・北半球中緯度では、7 月の月平均気温は多くの地域で平年と比べてかなり高くなりました。特に、ヨーロッパ～ロシア西部、東シベリア、中国北部周辺、米国東部等では、異常高温となりました。
- ・日本では、北・東日本の月平均気温はかなり高く、東日本の下旬の平均気温は 7 月下旬としては過去最も高い記録を更新しました。7 月下旬以降、猛暑日を観測する地点が増加しました（図 1）。

2 大気の流れの特徴

- ・北半球中緯度の対流圏の気温は、1979 年以降の 7 月で最も高くなっていました。これは、エルニーニョ現象に遅れて、インド洋等の熱帯の海面水温や大気の水蒸気が増えることが一因とみられます。また、温暖化に伴う長期的な気温の上昇が背景となっている可能性もあります。
- ・北半球中高緯度では、偏西風（寒帯前線ジェット気流）の南北蛇行が非常に大きく、蛇行の程度は 1979 年以降で最大規模でした。
- ・梅雨明け後に日本に猛暑をもたらした大気の流れについて、梅雨明け後の 1 週間くらいは、偏西風（亜熱帯ジェット気流）が日本付近で北側に大きく蛇行したため（図 2）、また、8 月に入ってから、上層のチベット高気圧が本州付近に張り出したため、日本付近の高気圧が強まりました。

なお、日本の天候の見通しについて、今後 2 週間は、ほぼ全国的に気温の高い状態が続き、かなり高い日もある見込みです。

※ 本分析にあたっては、異常気象分析検討会委員の協力を頂きました。

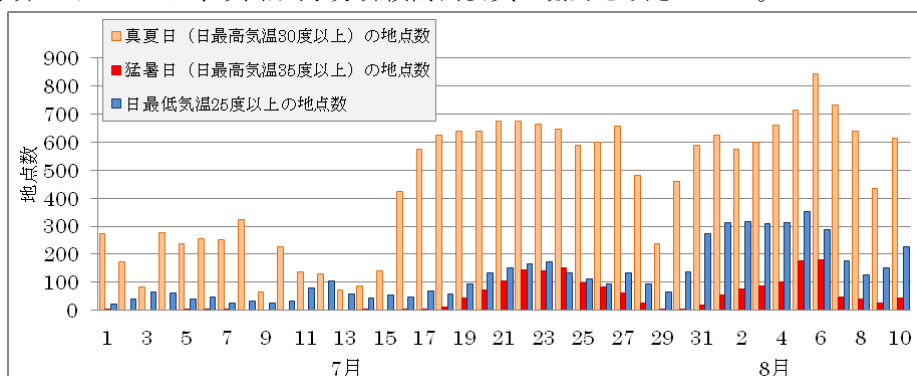


図 1：日本の真夏日（日最高気温が 30℃以上）、猛暑日（同 35℃以上）、日最低気温が 25℃以上となった地点数（全 921 地点）

日最高気温が 35 度以上の猛暑日となった地点は、梅雨明け後に増え始め、7 月 24 日には全 921 地点のうち 152 地点となりました。7 月末にはいったん減少しましたが、8 月に入って再び増え、6 日には 179 地点となりました。

図 2：本州付近の梅雨明け直後の日本付近の偏西風（亜熱帯ジェット気流）と高気圧

ライン状は、上空 12,400m 付近の偏西風の強いところ（亜熱帯ジェット気流）を示す。

■領域は、対流圏下層の高気圧（太平洋高気圧）を表す。

（気象庁ホームページから）

